

義兄の"いい子"にされました

～大学でも続く調教～

体 験 版

# 第 1 話

---

同居初日に押し倒されました

---

実家の玄関は、母がいなくなった瞬間、他人の家になった。

ことねは花束を抱えて立ち止まる。母のブーケだ。式場から空港へ向かう車に、母は持って降り忘れた。

代わりに持ち帰ったのが、ことねだった。

ブーケを靴箱の上に置く。白い包み紙が、玄関灯に照らされて、妙に明るい。

「重かったろ？」

背後から声がした。

ことねは肩で頷く。玲司の声を肩で受け止めるのが、いつの間にか癖になっていた。

「平気です」

「コート、貸してみ」

伸びた手が肩にかかる。

脱がせる動作には、迷いがなかった。ことねは脱がされるままになる。式の間ずっと張り詰めていた肩が、コートを失うとふっと軽くなった。

「ありがとうございます」

「敬語、要らないんだけど」

「……要ります」

玲司は低く笑った。否定の含まれない笑い方。

受け取ったコートを玄関先のハンガーに掛ける。リビングへ続く廊下の灯りは、母が出る前に全部つけたままだ。普段なら節電を口うるさく言う母の、最後の置き土産のつもりだろう。

ことねは靴箱からブーケを取り、リビングの花瓶に挿した。挿し終えてから、もう自分の家ではない気がして、手の置き場を失う。

キッチンへ回ると、玲司はもう冷蔵庫の前にいた。手にはビールの瓶が二

本。

「お祝い、しょ」

「私、お酒は」

「一杯だけ。新しい家族の挨拶」

ことねは口を開きかけて、閉じた。

(一杯だけなら、断る方が不自然か……)

カウンターのスツールに腰掛ける。

玲司は栓を抜き、ことねのグラスに注いだ。泡が乾いた音を立てて壁を作る。

「いただきます」

ことねは一口含む。

喉が冷たくなり、胃に落ちて、肩の力が抜けた。

玲司は注ぎ足す。

「もう一杯」

「いえ、本当に……」

「家族なんだから、いいだろ?」

ことねの手元のグラスは、もう半分なくなっていた。

二杯目に手をつけた頃には、最初の一杯がどこへ消えたのか分からなくなっていた。

ことねは酒に弱い。一杯で記憶が薄まる。二杯目で輪郭が溶ける。

カウンターに肘をついた腕の角度が、いつのまにか曖昧になっていた。

玲司はグラスを置いた。

「ことね」

「……はい」

「お兄ちゃん、まだ挨拶してなかったよなあ？」

「……？ お兄ちゃんとしてのご挨拶、ですよね」

「そう思いたきゃ、思っとけば？」

ことねは顔を上げた。

玲司は薄く笑っていた。両手をカウンターに置いて、ことねの椅子の両側を



塞いでいる。逃げ道は、いつの間にか塞がれていた。

(あれ……、いつから、こんな近くに……)

ことねは背筋を伸ばす。背筋を真っ直ぐにすれば、相手と対等になれる。ゼミで身につけた癖だ。

「冗談はやめてください」

玲司の目を見て、言った。

「あなたは……義理とはいえ、お兄さんでしょ」

玲司は、笑った。

目が笑っていない笑い方だった。

「義兄ね」

「はい」

「俺、お前のこと、ずっと前から知ってるんだけど」

「え？」

「忘れたなら、それでいいよ」

玲司の手がブーケに触れる。

その薬指に、銀の指輪が嵌まっていた。

ことねは初めて、それに気付いた。  
式の間も、披露宴の最中も、玲司の手は何度も視界に入っていたはずだ。なの

に、ことねの目は、ずっとそれを通り抜けていた。

玲司の上着のポケットで、スマートフォンが震える。

玲司は片手で取り出して、画面を見る。

「ちょっと出る」

「どうぞ」

玲司はリビングの窓際へ歩いていく。

「ええ、予定通りです。半年は、心配ありません」

「はい、彼女もこちらに」

「では」

低い声だった。仕事の声でもない、  
家族の声でもない、契約相手と話すよう  
な声。

(仕事の電話、よね……)

ことねは耳を傾けかけて、やめた。  
聞いてはいけない気がした。

玲司はスマホを切って、戻ってき  
た。

ことねの椅子の正面に立つ。

「子猫ちゃん」

「……」

「酔ったろ？」

「……すこし」

「カウンター、冷たいから、危ないなあ」

玲司の手が、ことねの腰に伸びる。

ふわっと体が浮いた。

気付いたときには、ことねはキッチンの大理石のカウンターの上に、仰向けで寝かされていた。

カウンターは冷たかった。

ことねの背中へは、触れた瞬間、ぞくぞくと震える。スカートはまくれ上がり、太腿の付け根まで露出していた。

玲司は片手でことねの両手首を捕まえる。

自分のネクタイを解いた。

ことねの手首に絹の感触が巻きつき、頭の上で結ばれる。

玲司は結び目を確認した。

「子猫ちゃん、お兄ちゃんに、ご挨拶しとけよ♡」

「や、待って……、ま、待ってください。」

ことねは身をよじる。

玲司の唇が、首筋に降りてきた。

ちゅう♡ちゅう……っちゅう♡  
ちゅう♡ちゅう♡ちゅう♡

うなじを連続で吸われる。

ことねの背筋が、勝手にしなった。

「やぁ……っ♡そこ、しないで……♡」

「うなじ、弱いんだなぁ？」

「ち、ちが……、やぁ……っ♡」

玲司の唇は、うなじから耳へ移動する。

耳たぶを、唇で挟む。

ちゅう♡ちゅう♡ちゅう♡ぴちゃ♡  
ぴちゃ♡ぴちゃ♡

舌が、耳の中に入った。

「あああ……っ♡♡ や、やめ、おみみ、おみみ、らめなのお♡」

「お耳、お豆さんと繋がってるの、知ってる?」

「し、しらな……っ♡」

「いま、教えてあげるなあ♡」

ぴちゃ♡ ぴちゃ♡ ぴちゃ♡ ぬる……  
っ♡ ぴちゃっ♡

(耳……、なんで、耳で、こんな……  
っ♡)

玲司の指が、ブラウスのボタンを外す。一つ、二つ、三つ。



ブラの上から、玲司の指が乳首を探り当てた。

すりすり♡ すりすり♡ こりこり♡

布越しに撫でられる。

ことねは唇をかむ。

(こんなの、お酒のせい、お酒のせい……、だよね……?♡)

玲司はブラの上端を引き下ろした。

乳首が、外気にさらされる。

ピンクの先っぽが、すでに固く尖っていた。

「ふーん、ここ、もう勃ってんなぁ?」

「ち、ちが……」

「ことねちゃんの体、嘘つかないだろ？」

♡」

玲司の唇が、乳首に降りてくる。

ちゅう♡ちゅうう♡ちゅぱっ♡ちゅ  
ぱちゅぱちゅぱ♡

吸われる。

反対側の乳首は、指の腹で挟まれた。  
た。

くりくり♡こりこり♡つんつん♡く  
りくり♡

「ふああ♡あ、ああ……っ♡それ、ら  
め、らめ……っ♡」

「ダメ、じゃないだろ?子猫ちゃん」

ちゅばちゅば♡ちゅうう♡ぺろ♡ぺ  
ろぺろ♡

(あ、あ……、おっぱい、なん  
で……、こんなに、しゅごい……っ♡)

玲司の手が、スカートの中に入る。

パンティの上から、ふっくら盛り上  
がった部分を撫でる。

すりすり♡すりすり♡すりすり♡こ  
りこり♡

「ことねちゃん、もうこんなに濡らし  
てんなあ?」

「ち、ちが……」

「お兄ちゃんに嘘、つくな?」

パンティの脇から、玲司の指が滑り  
込んだ。

くちゅっ♡

音が、した。

玲司の中指が、ことねの中に入って  
いく。

ぬぷ……っ♡ ぬぷぬぷ♡ ぬぷ♡

浅いところで止まる。

「ことね、ココ、初めて?」

「……う……」

「素直に言え」

「は、はじめて……っ♡」

「ふうん」

玲司の指は、奥には行かない。代わりに、入り口でゆっくり回し始める。

ぐちゅっ♡ ぐちゅっ♡ ぐちゅぐちゅ  
ぐちゅぐちゅ♡

「ふぁ……、あ、ああ♡ なに、これえ♡」

「気持ちい?」

「ち、ちがう……っ♡」

「ふうん。じゃあ、もうやめよーかな?」

玲司は手を引きかける。

「やっ……」

ことねの口から、声が漏れた。

玲司は止まる。

「やめないで、って?」

(言っちゃった……、私、いま、なんて言った……?♡)

「い、いえ……、その……」

「言えないなら、お口で確かめてあげるなあ♡」

玲司の体が、下がった。

ことねの脚が、肩に乗せられる。

パンティが脇にずらされた。

れろお……っ♡

舌が、当たった。

「あああっ♡♡ そ、そこ、しょこ、ら  
め、らめえ……っ♡」

「お豆さん、こねこね♡しよーな♡」  
れろ♡れろ♡れろれろ♡ちゅぱちゅ  
ぱちゅぱ♡

「ふああああ♡♡ や、やあ、やめ……  
っ♡♡」

ちゅうう♡じゅぱっ♡じゅぱじゅぱ  
じゅぱ♡ぺろぺろぺろ♡

吸われ、舐められ、転がされる。

(あたま……、しろい……、なに、こ  
れ、なに……っ♡♡)

玲司の舌が、クリトリスを押し潰す。

じゅぱっ♡ じゅぱっ♡ ちゅううう  
♡♡

「ひぎっ……♡ あ、ああああ♡♡ いぐ、いぐ、いぐう♡♡♡」

ことねの腰が、カウンターから跳ねた。

ぴゅっ♡ ぴしゃっ♡

玲司の口元に、しずくが飛ぶ。

玲司は、口元を拭わない。

その代わりに、笑った。



「お豆さんで、一回。次は、おまんこの番なあ♡」

ぐったりと脱力したことねの脚が、  
両端に押し当てられる。

パンティが、引き千切られる音がした。

玲司は自分のベルトを外す。

布が擦れる音と、バックルが落ちる音。

ぬぷっ♡

先っぽが、入った。

「あっ……、お、おっき……っ♡」

「ことねちゃんのお肉、すごい絞めてくるなあ♡」

ぬぷ♡ ぬぷ♡ ぬぷぬぷ♡ ぼちゅっ♡

少しずつ、奥へ。

玲司は途中で止まる。

「ねえ、子猫ちゃん。一気に行くよ?」

「やっ、ま、まっ……」

ぼちゅぼちゅぼちゅぼちゅぼちゅぼちゅ  
ちゅ♡

根元まで、一気に入った。

「あ……っ♡♡ いっ、いた……っ♡」

「ハフハフ♡……、ことね、すごい、いい♡」

玲司は、ぐっと止まる。ことねが慣れるのを待つ風でも、待たない風でもない。

止まった、というより、味わっていた。

「うん、ことねちゃんの中、お兄ちゃんに馴染むの、早いね♡」

「ち、ちが……、あ、ああ……っ♡」

（……、わたし、嫌、って言ったのに、おまんこ、もう、勝手に、しまっちゃってる……っ）

だちゅんっ♡ だちゅんっ♡ だちゅんっ♡

玲司は腰を打ち付け始める。

カウンターの上で、ことねの体が跳ねる。

だちゅんっ♡だちゅんっ♡だちゅん  
っ♡ぐちゅぐちゅぐちゅ♡

「ふああ♡♡ま、まっへ……、あ、あ  
あああ♡♡」

「へこへこ♡してあげるよ♡お嫁さん  
♡」

「ち、ちが……っ♡およめ、ちが……  
っ♡」

「変わらないだろ?ココ、誰のもん?」

ぐりっ♡ぐりっ♡ぐりぐりぐり♡

玲司は、ことねの最奥に当てたまま  
腰を回した。

「ひぎっ……♡ おっ♡ ……や……、  
や……、らああ♡♡」

（しゅご……、しゅごい……、おな  
か、おく、ぜんぶ、しゅごい♡♡）

だちゅんっ♡だちゅんっ♡だちゅん  
っ♡ぐちゅぐちゅぐちゅ♡ねちゅねちゅ  
ねちゅ♡

「言ってみ?子猫ちゃん。ココ、誰の?」

「れ、れ、れいじ、しゃ……っ♡♡」

「うん、よく言えたな♡」

玲司はことねの腰を持ち上げ、片脚を自分の肩に担ぐ。

体勢が変わると、当たる場所も変わる。

だちゅんっ♡だちゅんっ♡だちゅんっ♡  
ずぶずぶずぶ♡ぐちゅぐちゅぐちゅ♡  
♡

「ああ♡そ、そこ、らめ、しょこ、もお……っ♡」

「奥、ぐりぐり♡が、欲しい?」

「ち、ちが、ちが……っ♡」

「ふうん。じゃあ、ぐりぐり♡なしで、ヘコヘコ♡だけにしてあげる♡」

へこへこ♡ へこへこ♡ へこへこ♡ ぐ  
ちゅぐちゅぐちゅ♡

「やああ♡♡ ぐりぐり、して……っ  
♡♡ おく、おくに、ほし……っ♡♡」

「ことねちゃん、すごい素直になっ  
てきたじゃね?」

玲司の指が、ことねのクリトリスに  
戻ってくる。

くりくり♡ こねこね♡ くりくり♡

挿入と愛撫が同時。

「ひざいい♡♡ ま、まって、まって、  
しょこ、いっしょは……っ♡」

「一緒は、ダメ?悪い子だね♡ お嫁さん♡」

くりくり♡ くりくり♡ こりこり♡ くりくり♡

だちゅんっ♡ だちゅんっ♡ だちゅんっ♡ だちゅんっ♡

「ことねちゃん♡ イケ♡ お兄ちゃん  
で、イケ♡」

「ふあああ♡♡ いぐ……っ いぐうう♡♡♡」

ことねの背中が、カウンターから浮き上がる。

ぴゅっ♡ ぴしゃっ♡ ぷしゃっ♡



カウンターに、しずくが飛ぶ。

でも、玲司は止まらない。

だちゅんっ♡だちゅんっ♡だちゅん  
っ♡だちゅんっ♡

「ことねちゃん、もう、お兄ちゃんの  
形、覚えたかな♡?」

「お、おぼえ……、おぼえ、ちゃ……  
っ♡♡」

「素直になってきたなあ♡ えらいなあ  
♡」

玲司は片脚を肩から下ろす。代わりに、  
ことねの両膝の裏に手を入れた。

体を二つ折りに畳む形。

ぼちゅっ♡ ぼちゅっ♡ ぼちゅぼちゅ  
ぼちゅ♡

最奥が、もっと近くなる。

「ああああ♡♡ しょこ、らめ、おく、  
もう、らめなのお♡♡」

「ことねちゃんの中、お兄ちゃんを覚  
え込ませてあげる♡」

ぼちゅぼちゅぼちゅぼちゅぼちゅぼ  
ちゅ♡ ぐちゅぐちゅぐちゅ♡ ねちゅねち  
ゅねちゅ♡

「もっかい、行こうか♡」

「ま、まって、いま、いま、いった  
の……っ♡♡」

「だから、もっかい♡」

ぼちゅぼちゅぼちゅぼちゅぼちゅぼ  
ちゅ♡ねちゅねちゅねちゅ♡くりくりく  
り♡

(もう、なんも、わかんなくな  
る……、これ、これ、なんで、こん  
な……っ♡♡)

「れ、れい、れいじ……っ♡もう、も  
う、らめ、らめなのお……っ♡♡」

「お兄ちゃん、で、もっかい、イケ♡」

「ふああああ♡♡いぐ、いぐう、いぐ  
う♡♡♡」

玲司も、最奥まで突き込む。

どくっ♡ どくっ♡ どくっ♡ どくどく  
どく♡

熱が、奥に流れ込んだ。

(あ……、なか、で……、出てる……  
♡♡)

ことねは、トロリ♡と溶けた表情で  
カウンターに沈んでいた。

目の焦点は合わず、唇から細く息が  
漏れる。

玲司はネクタイを解いた。

ことねの手首には、薄く赤い跡が残  
っている。

玲司はその跡に、唇を寄せる。

ちゅっ♡ちゅっ♡ちゅっ♡ちゅう♡

「上手だったな♡」

ことねは応えない。

玲司はカウンターから降りる。ことねの体を抱え上げた。脱力した手足が玲司の胸の前でぐったりと垂れる。

玲司はリビングを横切る。ことねの寝室まで運んだ。

ベッドの上に横たえる。

乱れたブラウスを直してやる気はないらしい。代わりに玲司は、ことねの太腿の内側に流れたままになっていた自分

の痕跡を、自分の手で内側へ押し戻した。

ぬぷ……っ♡

「あ……っ♡」

ことねの唇が、半分目を閉じたまま動く。

「お利口さん♡ 零さないで、ちゃんと持っとけよ?」

玲司は寝具を引き上げる。ことねの肩までかけてやった。

眠っていく顔は、子供みたいに無防備だった。

玲司はベッドの脇に膝をつく。ことねの頬に、もう一度唇を落とした。

ちゅっ♡ちゅう♡ちゅっ♡

玲司の薬指の指輪が、ことねの頬に触れた。

冷たい銀の感触。

ことねは、それを覚えていない。

玲司は寝室を出るとき、明かりを消した。

ドアを閉めながら振り返る。

ベッドの上のことねは、口元にうっすらと笑みを浮かべて眠っていた。

玲司は、それを見て低く笑った。

玲司の上着の内ポケットで、スマートフォンの画面がまだ薄く光っていた。さっきまで撮っていた動画の最後の一瞬が、画面の中で、止まらずに、ゆっくり再生されていた。

翌朝。ことねが目を覚ましたら、これは夢だったと言うだろう。

玲司は知っていた。

知っていて、あらかじめ、夢だったと言わせない仕掛けを、もう仕込んである。



体験版はここまで

続きは本編をお求めください